



世界の終焉、  
三分前。



伽藍

少女と少年が出会ったのは、ほんの二、三分程前の事だった。

少女には、生まれ付き右眼が無かった。

中途半端に形成された右の眼球は無残に拉げ、それ以上閉じる事も開く事も出来ない、僅かに持ち上がった瞼の下からは、虚ろな白目が覗いていた。

なまじ顔立ちそのものはとても整っていただけに、周囲の人間にはその右眼が一層不気味なものに思えたのだろう、少女の扱いは悲惨なものだった。

両親に暴力を振るわれ、一人ずついた姉と兄からは陰湿な苛めを受けた。友人だって一人もいなかったし、他の親戚連中からはいないものとして扱われた。学校の教師は優しくしてくれたが、少女の家が資産家だった事もあり、透けて見える打算に彼女の方から切り捨てた。

年が十になるかならないかという頃になると、父親からの性的虐待も始まった。それによって、更に母親からの暴力もエスカレートした。

助けてくれる人間なんて、一人もいなかった。尤も少女にとってはそれが当然の事であって、今更何を望むでもなかったのだが。

あれは、いつの頃だっただろう。そう、一一恐らく、父と母が少女を売り飛ばす算段をしていたのを、見た日だったように思う。

完全な家畜扱いだったから、それを隠そうともしていなかった。珍しく笑顔を向けられたかと思えば、可愛がって貰いなさい、と穏やかに告げられた。

その時少女が何かを思ったかといえば、答えは否だ。ただ、そう一一ああ、結局最後までこの人達と視線が合う事はなかったなと、そんな事をちらと考えただけだ。

その日が、特別な訳ではなかった。ただ、その日、一人の少年と出会ったという、それだけで。

特別な出会いがあった訳ではない。ただ、子供同士よくやるように、軽い調子で声を掛けられただけだ。偶々旅行に来ていたという、その少年に。

恐らくは興味本位なのだろう、と少女は思った。今までも、同年代の人間から気紛れに誘われた事が無かった訳ではないからだ。そうして遊んだ翌日には、相手はまた苛めの輪に戻り、或いは存在しないものとして扱われる事になる。

子供は残酷な生き物なのだという事を、少女は知っていた。

それでも、二人は一緒に遊んだ。特に変わった事をした訳ではないだろう、実際に少女はその時の事をあまり覚えていない。下手をすると、そこら辺を歩き回って終わり、だったような気がしなくもない。

印象に残っているのは、その少年に言われた言葉だった。

少女の右眼は完全に使えないものだったが、彼女の左目は橙色をしていて、実を言うと彼女は、その瞳をとても気に入っていた一一勿論、他人は見ようとしなかったけれども。

だから、それを言われた時、とてもとても驚いたのだ。

「一一綺麗な色！」

深い藍色の瞳を無邪気に煌めかせて、少年はそう言った。不覚にも少女が言葉を失っていると、続け様に。

「俺、将来、この辺に住むんだ。だから、その時は、俺があんたの右眼になってやる！」

子供は残酷な生き物なのだという事を、少女は知っていた。

他愛も無い思い付きだ。実際には、そんな事があり得る筈も無い。恐らくはこの少年も、無邪気なままに、自覚も無いままに少女を裏切るだろう。

それでも、けれど、――それでも。

少女は自分の名前を教えた。それから、覚えておいてくれとも。裏切られても、もう構わなかった。

それから少年と別れた。橙の瞳が涙に濡れたのは、あれが最初で最後だったかも知れなかった

。

「――で、それが俺だって？」

二人は、背中をコンビニの壁に預けて、地面に直接座り込んでいた。

「そう」

「ふうん……」

こっくりと頷いた少女は隻眼だ。左の橙だけが、仄かな月の光を弾いている。それに対して首を傾げた少年は、奇妙に現実感を失った声で相槌を打った。

「そう言われても――」

「ああ」

得心したように少女が声を上げる。ハイティーンであろう彼女が身動ぐ度に、長く――というよりも、単に無造作に――伸ばされた髪が、さらりと揺れる。

「君には記憶が無いのだったか」

下弦の光を受けるコンクリートはしかし、少女には殆ど視認出来なかった。空中に漂う汚染物質の所為で柔い光を通さないのだろう。

「そう！」

二人共、地面に座り込んで、壊れて打ち捨てられた人形のように足を投げ出していた。周囲に人影は無く、ただ、ほんの数日前までは確かに生きていた筈の建物が、廃墟として広がっているだけだ。

少年はあっけらかんと、至極軽い調子で続けた。

「親も、友達も、いたかも知れない兄弟も恋人も――ああ、この年で子供はいねえかなあ、流石に――それに、自分の名前も。俺を拾ってくれた人は、俺の知り合いじゃなかったしなあ。皆忘れちゃったよ。失くしちゃった。何もかも、全部、一つ残らず、欠片も残さず、どっか行っちゃった。俺を拾ってくれたのは俺の父親くらいの年の人だったけど、昨日狂って、川に飛び込んでそれっきりだ」

「――そうか」

「んん……ってか」

ひょいと眉を上げて、少年が道化のように藍色を眇める。

「あんたみたいなのが珍しいんじゃないかねえの？ まだ正気保ってるなんて」

「……………狂う程の理由が無かった。それだけだ。失いたくない命も、守りたい友も、惜しい地位も名誉も財産も、何一つ持っていなかった――元々な」

「ああ、そういやそうだっけ」

少女の身の上話を聞いたばかりなのだった。一方的に捲くし立てられた半生を思い浮かべながら、少年は同情する様子も無く手を打った。

そもそも、現状の地球で、未だに正気である人間の方が珍しいのだ。

殆どの人間は、桁外れの磁場の影響で脳を破壊された――少年も恐らくその類だろう。そして、そうでないものは、現実に耐え切れずに発狂した。

――そう、人が滅ぶという、その現実に。

どうやら、人間は、あと少しで滅んで仕舞うらしい。戦争撲滅を謳って作られた、世界中の核

兵器の管理装置であるマザーコンピューターが突如暴走し、発射までのカウントダウンを始めてから既に一週間。打てる手は打ち尽くし、それでも起爆命令を解除する事は出来なかった。

只管に進化し続けた核兵器は最早廃棄しようとして出来るものではなくなっており、その抑制装置として作られたのがマザーコンピューターだ。欺瞞と策謀に彩られて作られた機械は、今や抑制装置としての機能を放棄し、非の打ち所の無い優秀な起爆装置と化している。

人は滅ぶ。

これ以上ない程確実に、簡単に、呆気無く。

街は死んだし、人は狂った。――ああ、そう言えば、地球上から人間以外の全ての生命が死に絶えてからもうどのくらい経ったのだと、あの人は言っていたか――。

ほんの数日だけ父親代わりであった男を思い返しなが、いまいち悲観する気になれないのは、少年の記憶が無く、全て他人に聞いた事実だからか、それともこれこそが、少年自身もまた狂っている証だろうか。

「――一人が滅ぶ？」

少女の嘲笑で、少年は我に返った。

否、――少女は、ただ笑っていた。

「何を今更！」

何の邪気も無く。

「人は滅ぶんだよ、逃れようもなく、誤魔化しようもなく！ 呆れるくらい明確にね！」

何の屈託も無く。

「そんなの、人が生まれる前から決まっていた事、判り切っていた事じゃないか！」

何の恐怖も無く。

「ああ――」

不意に、少年は思い付いた。

自分が記憶を失くしたように、この少女もまた、何かをどこかに置き忘れて来たのかも知れなかった。

不思議と、それに対する嫌悪感も違和感も無かった。

世界は終わる。

成る程確かに、それは否定なぞする意味も無い事実なのだろう。

「うん」

「なあ、だからさ、――素敵じゃないか？ 世界が終わる日に再会するなんて。本当にそんな事があったら、運命だと思わないか？ 私達」

――呼吸、考えた。

「――嘘かよ！」

「さあ？ そんな事、どちらだって構わないじゃないか。どうせ君には記憶が無いんだし、――三分で何が出来る訳でもないんだし。だったらこうして」

座り込んだまま、コンクリートを裸足の爪先で悪戯に蹴り付けて、少女は肩を竦めた。

「無駄話でもしていた方が、よっぽど有意義だろうよ」

「……道理だ」

観念して、少年は笑った。

夜の街からは、既に光という光が失われている。二人が背を預けている、コンビニからも。

否、元コンビニ、と称した方が良いのかも知れない。そこはもうコンビニではなかったし、その箱の中身は既に、人々によって奪い尽くされた後だったから。

「――綺麗だね」

「え？」

「星」

「ああ……本当だ」

顔を見合わせて、二人して笑った。ほんの一週間前には闇しか広がっていなかった天球は、今や数え切れぬ程の星で埋め尽くされている。空気が汚染されていなかったら、恐らくもっと見える星の数は多かったのだろう。随分と前に無くなって仕舞った星座だって、また見る事が出来たかも知れない。

不意に、少女が身動ぎした。肩に掛かっていた髪が、さらりと流れて落ちる。

「――――ああ、あと三十秒か……。――なあ」

「ん？」

少女がこちらを向いたのが判って、少年も少女に向き直った。彼女の橙の左眼は、酷く美しい色をしているのだ。

「名前、呼んでくれ」

「――は？」

思わぬ台詞に、つい頓狂な声を上げる。

「いや、知らないし。あんたの名前」

「うん、だろうな」

「そもそも、出会い頭にいきなり怒涛のように語り出されたから、俺は今こうして付き合ってる訳なんだけど」

「うん、そうだな」

少女の隻眼は、藍色を真っ直ぐに見詰めていた。どこまでも透徹とした瞳に、居心地悪そうに少年が頭を搔く。

「……何で」

「だって私はあの時、君の名前を聞いていないからね。で、君も自分の名前を知らないという。だったら、君が私を呼ぶしかないだろう？」

「どんな理屈!？」

無茶苦茶だ。

色々なものを諦めた声で、少年は問う。

「――じゃ、名前は？」

「君が思った名前を。――私は以前教えたよ」

「嘘の癖に」

「うん、嘘だけど」

にっこり、飽く迄名乗る気は無いらしい少女に、少年は盛大な溜め息を吐いた。

「ほら、あと五秒！」

急かす声に、彼は顔を上げた。

橙と藍が交錯する。

この時、この瞬間——成る程世界は終わったのかも知れないが、二人の瞳に映っていたのは、互いのその色だけだった。

少年が口を開く。

「————」

少女は、ただ。

擦ったように、左眼を細めて微笑んだ。